

速水 格先生のご退官によせて

棚 部 一 成 (地質学専攻)

2月も半ばを過ぎ、先生を定年で東京大学からお送りする時期が迫ってきました。しかし、毎日夜遅くまで精力的に研究をされている先生のお姿を拝見すると、なかなかその実感がわきません。速水先生は昭和36年に大学院博士課程を修了された後、日本学術振興会の特別研究員を経て、昭和37年に九州大学理学部地質学教室の助手になりました。私が先生に初めてお目にかかったのは、同大学大学院修士課程に進学した昭和46年4月のことでしたが、昭和48年に東京大学総合研究資料館の助教授として転任されるまでの2年間、進化古生物学の基礎や研究者としての心構えなど実に多くのことをご指導いただきました。また昭和61年に本学に転任してから以後も、折に触れ研究・教育面でご助言いただき、深く感謝しています。速水先生は当時普及していた少数標本に基づく化石種の記載分類学的研究に疑問を持ち、化石といえども集団を単位とした変異や成長の解析を基礎として、進化や系統分類の研究にあたらねばならないとする考えをいち早く導入されました。そして、「アロメトリーと個体変異の解析」、「不連続変異の重要性と古遺伝学の可能性」、「化石帯の進化的解釈」などの画期的論文を次々と書かれ、我が国における集団古生物学の基礎を築かれました。当時、速水先生や私は古生物学講座ではなく、層序学講座に所属していましたが、速水先生の研究室では、層序学・古生物学両講座の大学院生や学生が頻繁に訪れ、深夜に渡るまで議論が沸騰し、「速水スクール」と称されました。同スクールからは、小澤智生（現名古屋大学助教授）・大塚裕之（現鹿児島大学教授）・平野弘道（現早稲田大学教授）・松隅明彦（現九州大学助教授）などの方が巣立っていきました。

昭和59年には資料館から理学部地質学教室の教授へとなされました。先生のご研究は主に二枚貝類を対象としていますが、個別の現象にとどまらず、系統分類学・進化学・機能形態学・生物地理学などに深く踏み込んだ包括的で革新的な論文を内外の学術誌に数多く書かれています。その業績が国際的に高く評価されていることは、いくつもの国際誌の Editorial board にノミネートされていることからわかります。中でも、資料館時代にまとめられた二枚貝の一種ヒヨクガイの自然史と進化についての総括論文は、先生の代表作のひとつといえると思います。最近では、資料館時代の教え子である加瀬友喜博士（国立科学博物館）と共同で、琉球列島の海底洞窟から発見された原始的軟体動物群の分布調査や分類学的研究を精力的に行っており、その成果の一部は昨年末に資料館の研究報告にまとめられました。

学会の会長や評議員などの活動で多忙な毎日でも、速水先生は学生・院生の論文に丁寧に通され、研究方針に対しても親身に成って議論し指導に当たられました。先生の基本的指導方針は、各人の個性を尊重し潜在的能力を引き出すことにあるように思います。従って、教え子の研究テーマは数理解析に基礎を置く研究から野外での観察に重点を置くものまで多岐にわたり、扱う対象も化石から現生生物までさまざまでした。しかし、観念的議論や他人の資料のコンパイルに基づく研究は嫌われ、フィールドワークや一次データを集めることの重要性を常日頃指摘され、自らもこれを実践してこられました。東京大学へ移られてからも、このような創造性を大切にする「速水スクール」から、多くの優れた門下生が育って来ました。

「政治的なことは苦手だ」と自らが言われるように、研究・教育を第一に考えてこられた速水先生でしたが、資料館在職時代から自然史科学の育成と発展にはとくに努力されてきました。分類学の後継者を育成するための連合大学院構想はいまだに実現されていませんが、現在も学術会議の古生物学研連委員長として自然史学会連合の設立を目指して尽力されています。

自然をありのままに見つめ探究するナチュラルリストとして生きてこられた先生でしたが、学問を

離れてのご趣味は、麻雀・音楽鑑賞（とくにマーラーの曲が好きだそうです）・鉄道旅行と聞いています。私は、残念ながら麻雀はできませんが、旅行は好きなのでまたフィールド調査などの機会にご一緒したいと思っています。

ご退官後は神奈川大学に移られ、進化生物学の研究が続けられるとのことでした。先生の長年にわたる研究と教育に関するご尽力に深く感謝するとともに、今後も元氣でご活躍されますようお願い申し上げます。

